

### 第3回「通船川コース」東区まちあるきレポート

開志専門職大学 草間 大悟

此度、令和7年11月1日（土）に新潟市「東区E産探求プロジェクト事業」として行われた第3回「通船川コース」のまちあるきに参加した。本レポートでは、説明を受けたことや私の所感に関して述べる。

まず、通船川とは何かについて少し述べていく。通船川は、新潟市東区を東西に流れる全長約8.5kmの一級河川であり、信濃川水系に属している。もともとは阿賀野川から水を引き、信濃川河口付近までを結ぶ水路として整備されたもので、江戸時代から昭和初期にかけては木材や資材を運ぶ舟運の重要な役割を果たしていた。沿川には製材業や工場が立ち並び、新潟の産業発展を支える物流の要であった。そういった背景の中で今回、通船川沿いにある産業遺産を周遊するコースを以下に紹介する。



※上図のルートが今回の徒歩での移動ルート、© Google

株式会社リンコーコーポレーション→山の下閘門排水機場→大山ポンプ場→新潟合板振興株式会社という流れで街歩きを行った。当日は、生憎にも雨天に見舞われてしまったが、山の下閘門排水機場～大山ポンプ場は晴れ間が見えたので街歩きができ、通船川の沿川の雰囲気を間近で感じる事ができた。以下に、街歩きした順序で述べる。

#### ・株式会社リンコーコーポレーション

株式会社リンコーコーポレーションは、新潟県内の湾岸エリアを物流拠点とし、港湾運送・在来船荷役・コンテナターミナル・倉庫保管などを含む総合物流を担っている。特に、新潟西港の臨港埠頭では、五つの岸壁を用いて最大六隻の同時接岸を可能とし、多種多様な貨物（木材・製紙原料・鉄スクラップ・大型機械/プラント・融雪剤の塩・セメント/石油関係）を取り扱っている。また昔は、人が自由に臨港埠頭に出入りすることができたが、現在は SOLAS 条約の関係で港への立ち入りが厳しく制限されている。その為、この街歩きに参加しないとみられないものが多々あるので、来年以降の参加を強く勧める。

## ・山の下閘門排水機場



上：閘門の様子

山の下閘門排水機場は、新潟市東区に位置し、新潟平野のゼロメートル地帯における浸水被害を防ぐために設けられた重要な排水施設である。通船川は、昭和 39 年の新潟地震で堤防が崩れ周囲は水に浸かった。復旧には堤防を築かず低水路方式を採用し、津島屋と山の下に閘門及び排水機場を建設しており、排水ポンプによって水面は常に標高マイナス 1.65 メートルに維持されている。

また、閘門を併設することで、排水と同時に通船川を航行する船の阿賀野川と信濃川への通過を可能にしている点も特徴である。かつてこの地域は 8・4 梅雨前線豪雨災害等の水害に悩まされていたが、排水機場の整備によって浸水リスクが大幅に軽減された。現在では、防災機能だけでなく水辺景観の一部としても地域に親しまれており、新潟市の治水技術と地域防災力を象徴する施設となっている。

## ・大山ポンプ場



左：大山ポンプ場 右：周辺の様子

大山ポンプ場は、主に雨水・排水の処理を目的とした公共ポンプ施設であり、地域の浸水対策・治水インフラの一翼を担っている。また、このポンプ場前の通船川沿いエリアは、対岸の旭カーボン工場プラントを望む絶好の工場夜景スポットとしても知られており、地域の工業・物流・景観の交差点となっていると感じた。

よって、大山ポンプ場は、防災・排水インフラとしての技術的機能と、地域景観・産業

観光資源としての文化的・観光的価値の双方を併せ持つ場所といえる。今後も気候変動による降雨増加・浸水リスク上昇への備えとして、その運用・維持管理が地域にとってますます重要となるだろうと地域防災について考えるきっかけとなった。

#### ・新潟合板振興株式会社



左：製造された ECO 合板 右：旧第一貯木場

新潟合板振興株式会社は、昭和 38 年に県内初の合板工場として創業を開始し、「鹿印」ブランドで知られる普通合板の製造を主力としている。当時は、通船川沿いに第一貯木場がありそこに原料である海外の木材を保管していた。しかし、木材価格の高騰の影響で海外材主体であった南洋材合板から、県産材である杉や松などを活用した「ECO 合板」\*1へと原料調達と製品設計を進化させており、資源有効利用と環境配慮を両立している。また、品質マネジメント体制として ISO9001・ISO14001 の取得実績がある。

さらに、合法木材供給事業者登録や木質バイオマス証明事業者となるなど、サステナブルな木材加工（加工時はがした樹皮をボイラーの燃料にするなど）をすることで社会的責任も果たしていると感じた。

#### ・まとめ

今回のまちあるきでは、水と産業が共に発展してきた地域の姿が見えてきた。かつて、通船川を軸とする港湾・河川ネットワークは、物流や排水の機能を担いながら、新潟の経済と生活を支えていた。現在としては、水運していた木材は基本的に陸上輸送になっており、東区内で水害が起きないようにする排水の機能と地域の景観を担うように姿が変化してきていると考える。株式会社リンコーコーポレーションのような港湾物流企業は、海と陸を結ぶ要として地域産業の発展に貢献しており、山の下閘門排水機場や大山ポンプ場は、二度と豪雨災害・水害がおこらないように地域の安全な暮らしを守るインフラとして不可欠な存在であると認識した。また、新潟合板振興株式会社のように地域資源を活かした合板の製品開発・製作を行う企業は、環境と産業の両立を実現しようとしている。これらを通して感じたのは、産業やインフラは単に経済活動を支えるだけでなく、地域の安全・環境への配慮・次世代への持続性を見据えて発展していくべきだということだ。新潟

の湾岸地域には、その調和のあり方を体現する多くの学びがあると感じた。

参考元：[新潟合板振興株式会社 HP]

ECO 合板

フェイスバックには、美観と表面性に優れたラワン材を使用し、芯材に農林水産省推奨の国産間伐材（越後杉）を使用した「画期的環境配慮型合板」のこと。

地図引用元：Google map

<https://www.google.com/maps>